



| | |
|--------------|---|
| Title | 京都高等工芸学校におけるアメリカデザインの受容 |
| Author(s) | 和田, 積希 |
| Citation | デザイン理論. 2026, 87, p. 116-117 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/103738 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

京都高等工芸学校におけるアメリカデザインの受容

和田 積希 京都工芸繊維大学美術工芸資料館

はじめに ― 研究のきっかけ

発表者はこれまで1902年（明治35）に開校した京都高等工芸学校（以下、京高工）の図案教育について研究するなかで、同校図案科の第1期卒業生でのちに教授となる霜鳥之彦（1884-1982）に注目してきた。霜鳥は、初代教授の浅井忠（1856-1907）の指導を受けた洋画家であり、大正・昭和期の関西デザイン界の指導者でもあった人物である。彼は、卒業後の1906年に助教授で洋画家の牧野克次（1864-1942）に随行して渡米し、1920年（大正9）の帰国まで同地に滞在した。この渡米の理由を検証するなかで、当時の美術界・産業界におけるアメリカの位置づけについて興味をもった。京高工では開校前に教員らが渡欧して研究に従事するとともに、最新の技術やデザインの参考資料として現地でポスターや工芸品を収集し、教材として活用した。教材収集は開校後も継続されたが、アメリカ製の資料が収集されるのは1909年のことである。開校から霜鳥らが渡米する1906年の間に、同校でのアメリカに対する認識に変化があり、さらに彼らの渡米が教材の収集に結びついたのでないか。今回はこのことを、当時の言説と現存する教材を通じて検証する。

開校初期における京都高等工芸学校を取り巻く状況と教材収集

輸出工芸で復興をとげた京都の伝統産業界も明治20年代に入ると、粗製乱造や華美な海外向けデザインが敬遠され、再び不振に陥った。とくに1895年の第4回内国勸業博覧会で酷評を受けた陶

芸界では、翌年に京都市陶磁器試験場を設立して対応をはかった。場長には東京工業学校でワグネルの助手をつとめた藤江永孝（1865-1915）が抜擢され、顧問にはのちに京高工初代校長となる中澤岩太（1858-1943）が就任した。試験場では最新の技術やデザインをもつ参考品の収集がおこなわれ、1910年に参考品陳列館が設置されている。また、1903年には藤江の技術指導のもと中澤を園長とする京高工教員らと清水六兵衛ら京焼の作家たちによる研究団体、遊陶園が結成され、あらたな京焼の開発に取り組んだ。この時期の京高工の教材をみってみると、開校から1903年前半にかけて、海外製品が多数輸入され、陶芸ではデンマークのロイヤル・コペンハーゲンやフランスのショワジー・ル・ロワ、ハンガリーのジョルナイ工房などヨーロッパのものが大半を占めている。その後一部例外を除き国内の資料が収集され、1909年頃から再び海外の資料が輸入された。この際、ヨーロッパにくわえアメリカ製品が登場している。

アメリカデザインへの注目

アメリカでは、ヨーロッパにやや遅れて産業革命が展開したが、19C末にヨーロッパを凌ぐ生産力をみせ、1904年のセントルイス万博でその隆盛はあきらかとなった。この時期のアメリカの産業については、日本の多くの雑誌や報告書で言及されている。たとえば、1902年3月発行の『千九百年巴里万国博覧会 臨時博覧会事務局報告 下』では、アメリカの工業の著しい進歩とともに、工芸は凡庸で幼稚の境を脱していないことが報告さ

れているが、1905年1月5日の『美術新報』（画報社）によるセントルイス万博の報告では、ルクウッド製陶所が雪舟など日本の古画を参考にして、光沢消し釉の上品なものをつくっていることや白山谷の仕事ぶりについて語られており、日本の工芸への焦りをみてとることができる。1880年にシンシナティで創業したルクウッド製陶所は、石川県出身の陶芸家、白山谷喜太郎（1865-1948）を画工として招聘し、日本のモチーフを用いたデザインで脚光をあびた工房である。同社はデザインの過程で写生を重視しており、これは京高工が指導していた便化とよばれる図案法と共通するものであった。また、同年3月発行の『農商務省商工局臨時報告 明治三十八年第三冊』（農商務省商工局）第5章では、アメリカの製陶業が廉価な食器類と無地に色釉薬の装飾品に二極化している現状が報告され、後者の主要な工房として「Van Briggles Pottery」、「Grueby Pottery」などがあげられるとともに、やはりルクウッド製陶所の進歩が著しく、同所から標本を購入し、農商務省商品陳列館に納入したことが記されている。このように、アメリカの産業はとくにセントルイス万博以降、その重要性が増していたことがわかる。

また、この時期の京高工では、講師の鹿子木孟郎（1874-1941）や助教授の村山順（1879-1954）など、霜鳥以前に多くの関係者が渡米しており、牧野もアメリカで松楓殿などの建築装飾に関わったが、時折帰国し、中澤らに協力をあおいだようである。また藤江も1909年に陶磁器調査に出向き、帰国後にその渡米談を京都府立図書館で講演している。さらに教授の武田五一（1872-1938）は、1908年より大蔵省臨時建築部技師に就任し、議院建築調査のためサクラメントやワシントンを視察したほか、1909年には日英博覧会鑑査官に就任し、1912年からはパナマ・太平洋万博の事務取扱を引き受け、日本館等の設計にあたった。1914年には再度アメリカに出張しており、この時期急速にアメリカとの関係を深めていたことがうかがえる。

京都高等工芸学校におけるアメリカ陶磁・ガラス器の収集

京高工における最初のアメリカ製品の購入は1909年で、孔雀羽模様ガラス花瓶などティファニー工房のもの16点である。同年7月に絨毯見本、翌年の3月にルクウッド製陶所をはじめ、ヴァン・ブリッグル製陶所、マーブルヘッド製陶所、グルービー・ファイアンス社、オーウェン磁器、バッファロー製陶所、ピュワビック製陶所などの陶磁器が収集され、1915年にアレキバ陶器が収集された。陶磁器は工房別に1点ずつ購入されたものが多く、このなかでは10点とルクウッドが圧倒的に多い。ティファニー工房とルクウッド製陶所はアール・ヌーヴォーを代表する工房として、早くから日本でも知られていたと考えられ、京高工でも注目されていたと思われる。また、1911年10月に板谷波山（1872-1963）の花瓶が1点購入されている。波山はルクウッドなどを手本に早くから釉下彩に取り組んだ作家で、日本での応用例として収集されたと考えられる。

おわりに

京高工では、実物教材を通じて海外のデザイン・技術を取り入れようとした。それらは、開校直後は教員の留学経験にもとづきヨーロッパ中心であったが、1904年のセントルイス万博以降、アメリカ産業の進歩があきらかとなり、さらに1906年に牧野や霜鳥らが渡米し、つづいて武田がアメリカと密接に関わりをもったことでアメリカへの関心度は飛躍的に高まった。また1907年の浅井忠の死後、京高工で工芸から建築装飾・室内装飾へと教育方針が変遷するなかで、産業よりのアメリカデザインはその重要性を増していったと考えられる。教材の収集と社会情勢、教員の活動は常に連動しており、京高工の図案教育を考えるうえで、教材の背景を検証することは重要である。